

令和6年度

病害虫発生予察情報 第10号

7月予報

北海道病害虫防除所 令和6年(2024年)6月28日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

季節予報(付記)によれば、7月の天気は、北海道日本海側では、天気は数日の周期で変わり、北海道オホーツク海側・太平洋側では、平年と同様に曇りの日が多いと予報されています。気温は平年より高い確率が50%、降水量は平年並の確率が30%、平年より多い確率が40%と予報されています。

このような予報から、多めの発生が予想される病害虫は、水稻のアカヒゲホソミドリカスミカメ、秋まき小麦のアブラムシ類、ともしのオオタバコガ、大豆及び小豆の茎疫病、豆類の食葉性鱗翅目幼虫、小豆のマメアブラムシ、ばれいしょの軟腐病、アブラムシ類、てんさいの褐斑病、ヨトウガ、たまねぎの軟腐病、あぶらな科野菜の軟腐病、モンシロチョウ、コナガ、りんごのハマキムシ類、モモシクイガがあげられます。

なお、防除対策の詳細を紹介した「北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド」は北海道病害虫防除所のホームページ(<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>)で公開しています。

7月に注意すべき病害虫

作物名	病害虫名	発生予想		注意事項及び防除対策
		発生期	発生量	
水稻	いもち病	早	並	常発地帯では葉いもち防除を逸さないよう、BLASTAMを参考にモニタリングを行い、早期発見に努める。穂いもちに対する出穂期散布は必ず実施する。耐性菌発生リスクを高めないために、薬剤の選択に注意する。
水稻	アカヒゲホソミドリカスミカメ	やや早	やや多	第1回成虫の発生期(6月下旬から7月上旬)に、本種が増殖する水田周辺のイネ科雑草を刈り取る。1回目の茎葉散布は出穂期に行う。
大豆及び小豆	茎疫病	—	やや多	排水対策を講じる。発病前から予防的に散布する。
ばれいしょ	疫病	並	並	初発後は急激にまん延するので、FLABSや気象情報を活用し、散布遅れにならないよう注意する。
てんさい	褐斑病	やや早	多	複数の薬剤に対して、耐性菌の発生が認められているため、薬剤の選択には特に注意する。遅くとも初発直後までに散布を開始し、散布間隔の開きすぎに注意する。
たまねぎ	ネギアザミウマ	既発(早)	並	高温乾燥条件で急激に密度が上昇するので注意する。ピレスロイド剤に対する抵抗性系統が確認されているため、薬剤の選択には注意する。
あぶらな科野菜	コナガ	—	やや多	ジアミド剤に対する抵抗性個体群の発生が確認されているので、防除にあたっては薬剤の選択に注意し、散布後の効果確認に努める。
ばれいしょ、たまねぎ及びあぶらな科野菜	軟腐病	—	やや多	多窒素栽培を避ける。薬剤の予防散布を行う。ばれいしょでは1回目の茎葉散布は初発後直ちに行う。同一系統薬剤を連用しない。オキシリニック酸剤の感受性低下菌が出現しているため注意する。

A. 水稻

いもち病（葉いもち） 発生期：早 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) いもち病は弱い雨が長期間続いたり、寡照によって水稻の抵抗力が低下すると多発しやすい。発病適温は20～25℃であり、初発危険期は平均気温が20℃、最低気温が16℃に達した頃とされている。特に、保菌苗を本田に移植した場合は発生期が早まる可能性が高い。
- (2) 予察田（品種：「きらら397」）に設置した取り置き苗（接種）での初発は、比布町では6月16日（平年：6月23日）、北斗市6月14日（平年：6月20日）と平年より早かった。岩見沢市（平年：6月25日）では発生は認められていない。
- (3) 予察田での本田初発はいずれの地点においても認められていない。
- (4) 主要作付品種のほとんどは葉いもち抵抗性が“やや弱”である。
- (5) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、葉いもちの発生期は平年より早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 取り置き苗を本田や畦畔に放置せず処分する。また、多肥は本病の発生を助長するので窒素質肥料の過剰な分追肥をさける。
- (2) 気象情報や発生予察情報を参考にして、葉いもちの早期発見に努める（下記コラム参照）。
- (3) 昨年発生が見られた水田や常発地帯では、早めのほ場観察を励行するとともに、水面施用剤等の施用適期を逃さないよう注意する。
- (4) 葉いもちの病斑を発見した場合や近隣で発生が確認された場合には直ちに防除を開始し、1週間間隔で出穂期まで防除する。
- (5) 穂いもちに対する出穂期の散布は必ず実施する（基幹防除）。なお、葉いもちの発生が多く、出穂期間が長引く場合には、1週間程度の散布間隔で穂が完全に揃うまで散布を継続する。
- (6) MB I-D剤によるいもち病防除効果の低下が懸念される水田では同剤の使用を避ける。なお、MB I-D剤を使用する水田では、防除ガイドに準拠して使用する。
- (7) Qo I剤は東北地方でも耐性菌が確認されており、道内での耐性菌出現を避けるため、使用に際しては以下の点を遵守する。
 - ① 使用は年1回とする。
 - ② 体系防除を行う場合は作用性の異なる薬剤と組み合わせる。
 - ③ 採種ほどは使用しない。
 - ④ 規定量の処理を行う。

「BLASTAM」運用中

水稻の葉いもち発生予察システム「BLASTAM」（ブラスタム）による感染好適条件の結果を病害虫防除所のホームページで随時更新しています。防除開始の参考にお役立て下さい。

感染好適日から約1週間後は要注意。

ニカメイガ 発生期：早 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 6月の気温は平年より高く経過している。7月の気温は平年より高いと予報されている。
- (2) 一般田における前年の発生量は平年並であったことから、越冬密度は平年並と推測される。
- (3) このことから、発生期は平年より早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫発生最盛期は通常7月中旬から8月中旬頃であり、多発田では成虫発生最盛期及びその7～10日後に茎葉散布を実施する。

ウンカ類 発生期（ヒメトビウンカ第2回）：早 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察田の畦畔すくい取りによるヒメトビウンカ第1回成虫初発期は、北斗市で5月1半旬（平年：5月3半旬）と平年より早く、比布町で5月3半旬（平年：5月4半旬）と平年よりやや早く、長

沼町で5月2半旬（平年：5月2半旬）と平年並であった。

- (2) 畦畔すくい取り成虫捕獲頭数は、北斗市で平年より多く、比布町で平年並、長沼町では平年より少なかった。
- (3) 予察田すくい取りにおける成虫の捕獲は、いずれの地点も認められていない。
- (4) 予察灯調査によるセジロウカカの誘殺は、いずれの地点も認められていない。
- (5) 6月の気温は平年より高く経過している。7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、ヒメトビウンカ第2回成虫の発生期は平年より早く、ウンカ類の発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 多発による被害が予想される水田では、防除ガイドに準拠し、カメムシとの同時防除を実施する。
- (2) 吸汁害が発生するのは、7月下旬以降の第2回成虫発生時に株当たり寄生頭数が50頭(20回すくい取り換算頭数で成虫1,800頭)以上となった場合である。
- (3) なお、道内の広い範囲でMEP剤に対する抵抗性が確認されている。また、道外ではイミダクロプロリド剤及びフィプロニル剤に対する抵抗性が確認されていることから薬剤の選択には注意する。

イネドロオイムシ 発生期：既発（やや遅） 発生量：やや少
--

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察田における成虫の初発期は、長沼町で6月1半旬（平年：6月1半旬）と平年並、北斗市で6月2半旬（平年：6月1半旬）と平年よりやや遅かった。比布町では成虫初発は確認されていない（平年：6月1半旬）。
- (2) 産卵初発期は、長沼町で6月1半旬（平年：6月2半旬）と平年よりやや早かった。北斗市（平年：6月2半旬）及び比布町（平年：6月4半旬）では卵塊は確認されていない。予察田における卵塊数は、長沼町で平年より多く推移している。
- (3) 幼虫初発期は、長沼町で6月4半旬（平年：6月4半旬）と平年並、北斗市では6月5半旬（平年：6月4半旬）では平年よりやや遅かった。比布町（平年：6月5半旬）では幼虫は確認されていない。予察田における幼虫数は、長沼町で平年よりやや多く、北斗市では平年より少なく推移している。
- (4) 6月3半旬の巡回調査で、空知地方の1地点で卵塊が確認されたが、卵塊数が要防除水準を超えた地点はなかった。
- (5) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 老齢幼虫に対する防除効果は劣るので、防除要否は早めに判断する。
- (2) 薬剤散布は防除ガイドに準拠して実施する。

アカヒゲホソミドリカスミカメ（第2回） 発生期：やや早 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は第2回成虫が7月に発生し、水田に侵入する。成虫と幼虫がともに籾を加害する。7月の気象が高温少雨に経過した場合は第2回成虫の発生量が多くなる。
- (2) 水田畦畔におけるすくい取りによる成虫捕獲開始期は、比布町で6月8日（平年：6月14日）と平年より早く、長沼町で6月6日（平年：6月4日）と平年並、北斗市では6月16日（平年：6月8日）と平年より遅かった。
- (3) 予察灯調査による第1回成虫の誘殺開始期は、比布町で6月8日（平年：6月13日）と平年よりやや早く、北斗市で6月10日（平年：6月10日）と平年並、長沼町では6月14日（平年：6月9日）と平年よりやや遅かった。
- (4) 畦畔すくい取りによる捕獲成虫数は、比布町及び北斗市で平年より多く、長沼町では平年よりやや少なく推移している。
- (5) 6月の気温は平年値を上回って経過している（6月20日時点）。7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、第2回成虫の発生期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 第1回成虫の発生期（6月下旬から7月上旬）に、本種が増殖する水田周辺のイネ科雑草を刈り取る。
- (2) 茎葉散布は出穂期とその7日後の2回を基幹防除として実施する。
- (3) ジノテフラン剤、エチプロール剤またはスルホキサフロル剤を使用する場合、基幹防除を出穂期7～10日後の1回散布に省略できる。なお、追加散布については、従来どおりの基準で行う。

- (4) 水面施用剤は、出穂期から出穂7日後に施用すると出穂2週間後まで残効が認められ、出穂期及びその7日後の茎葉散布2回と同等の防除効果が期待できる。

フタオビコヤガ（第2回） 発生期：早 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 一般田における前年の発生量は平年より少なかったことから、越冬密度は平年より低いと推測される。
- (2) 予察田における第1回幼虫の発生量は比布町で平年よりやや多く、長沼町で平年並だった。被害程度は比布町で平年より高く、長沼町では平年並だった。北斗市では発生が認められていない。
- (3) 6月の気温は平年より高く経過している。7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、第2回幼虫の発生期は平年より早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (5) 7月下旬に10株について幼虫被害を調査し、被害株率が100%に達し、かつ被害葉率が65%を越えていなければ防除は不要である。

B. 秋まき小麦

赤かび病 発生量：少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 赤かび病は出穂期から開花期頃に雨天が続くと多くなり、その後の降雨により病勢が進展する。
- (2) 秋まき小麦が開花始を迎えた6月の気象の経過は、晴れた日が多く降水量は平年を下回ったところが多かった。
- (3) 7月の降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布間隔は7日、防除回数は合計2回を基本とし、開花期間が長引いたり、ばらつく場合には追加防除も検討する。
- (2) ミクロドキウム・ニバーレでは、クレソキシムメチル剤及びチオファネートメチル剤に対する耐性菌が広範囲で確認されていることから、本菌による赤かび病の多発が懸念される地域では使用しない。
- (3) 刈り遅れのないように注意し、刈取後収穫物を速やかに乾燥する。赤かび粒を除去するため、粒厚選別及び比重選別を実施する。

アブラムシ類 発生期：既発（やや早） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 小麦の生育は平年並に推移している。
- (2) 予察ほにおけるムギヒゲナガアブラムシの初発期は、訓子府町で6月3半旬（平年：6月4半旬）と平年よりやや早く、長沼町では6月4半旬（平年：6月4半旬）と平年並であった。ムギクビレアブラムシの初発は、長沼町（平年：6月6半旬）及び訓子府町（平年：6月4半旬）で認められていない。
- (3) 予察ほにおけるムギヒゲナガアブラムシの発生量は訓子府町で平年より多く、長沼町では平年より少なく推移している。
- (4) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 出穂10~20日後に1穂あたり7~11頭程度のアブラムシが寄生する（寄生穂率が45%を超える）と減収するので、薬剤防除を実施する。通常は1回散布で十分である。

C. 春まき小麦

赤かび病 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 赤かび病は出穂期から開花期頃に雨天が続くと多くなり、その後の降雨により病勢が進展する。
- (2) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布は開花始から行い、散布間隔は7日、防除回数は合計3回（抵抗性“やや弱”の「ハルユタカ」では4回）を基本とし、開花期間が長引いたり、ばらつく場合には追加防除も検討する。
- (2) 刈り遅れのないように注意し、刈取後収穫物を速やかに乾燥する。赤かび粒を除去するため、粒厚選別及び比重選別を実施する。

D. とうもろこし

オオタバコガ 発生期：早 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は道外から成虫が飛来し、幼虫がとうもろこし雌穂に食入し子実を食害する。
- (2) 予察ほのフェロモントラップにおける第1回成虫の誘殺開始期は、比布町で5月18日（平年：6月4日）、北斗市で5月13日（平年：6月1日）と平年より早かった。長沼町（平年：6月13日）、芽室町及び訓子府町では誘殺が認められていない。
- (3) 6月の気温は平年より高く経過している。7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は平年より早く、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 絹糸抽出揃い以降、1～2回薬剤防除を実施する。
- (2) 防除にあたっては他害虫の発生に注意し効率的な防除に努め、同一系統の薬剤の連用を避ける。フルベンジアミド剤、エマメクチン安息香酸塩剤、レピメクチン剤及びクロロントラニリプロール剤は室内試験で効果が高いことが確認されている。

E. 豆類

べと病（大豆） 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) べと病は第一次伝染源が種子であることが多く、多雨や多湿時、密植や過繁茂で風通しが悪いときに多発する。
- (2) 近年、発生は見られるものの、多発には至っていない。
- (3) 大豆の生育は平年並に推移している。
- (4) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生期、発生量ともに平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 本病による被害が出やすい黒大豆と抵抗性が“弱”の黄大豆及び青大豆品種では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。それ以外の黄大豆ならびに青大豆品種では防除の必要はない。
- (2) 本病の要防除水準は、開花始の上位葉の病斑面積率2.5%（1小葉当たりの病斑個数約30個）である。

菌核病 発生期：やや早 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 菌核病は花卉感染が主体であり、開花期以降の日照が少なく多湿な場合に多発する。また、感染源となる子のう盤の形成は、茎葉によって地表面がうっぺいされるほど良好となる。
- (2) 大豆、小豆及び菜豆の生育は平年並に推移している。
- (3) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は平年よりやや早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 開花時期に注意し、薬剤散布にあたっては、大豆では開花始から10～15日後、小豆では7～10日後、菜豆では5～7日後に1回目の散布を行い、その後必要に応じて、10日間隔で計2～3回散布する。

灰色かび病 発生期：やや早 発生量：少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 灰色かび病は開花期以降の天候が低温で多湿な場合に多発する。また、過繁茂状態は本病の進展を助長する。
- (2) 大豆、小豆及び菜豆の生育は平年並に推移している。
- (3) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。

(4) 以上のことから、発生期は平年よりやや早く、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布時期、散布間隔、散布回数は菌核病に準ずる。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。
- (3) ジカルポキシイミド系剤に対する耐性菌が全道で認められており、一部地域ではフルアジナム剤に対する耐性菌が認められているので、防除ガイドに準拠して適切な薬剤防除を実施する。

茎疫病（大豆・小豆） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 茎疫病は土壌が湿潤な条件で発生し、比較的気温が高い場合に多発する。なお、7月中旬以前に発病すると被害が大きくなる。
- (2) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 転換畑や排水性の不良なほ場では排水対策を講じる。また、培土処理は本病の発病を軽減できる。
- (2) 開花期前半までの発病を抑えることを目安にし、発病前から予防的に薬剤散布する。発病後に薬剤散布しても効果がないので、気象情報により大雨が予想された場合はその前に散布する。

食葉性鱗翅目幼虫（大豆・小豆） 発生期：並 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 大豆では開花期から莢伸長期に葉を食害されると最も収量に影響する。この時期の食害葉面積率が20%に達すると約5%の減収となる。
- (2) 予察ほにおいて、大豆の食害は長沼町及び訓子府町で平年並に推移している。小豆の食害は、長沼町で平年並に推移している。訓子府町では小豆の食害は認められていない。
- (3) 予察ほのてんさいにおけるヨトウガの産卵初発は、長沼町で平年並、芽室町では平年よりやや遅かった。訓子府町では産卵が認められていない（てんさいの項を参照）。
- (4) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生期は平年並、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 主要な加害種は、ツメクサガ、モンキチョウ、キタバコガ、ヨトウガである。
- (2) 大豆では鱗翅目幼虫の密度が開花前に大豆1個体当たり1頭、開花期頃に2頭、莢伸長期以降に3頭を超えなければ、薬剤防除の必要はない。

マメアブラムシ（小豆） 発生期：並 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおける初発期は、長沼町で6月3半旬（平年：6月4半旬）と平年よりやや早く、芽室町で6月4半旬（平年：6月4半旬）と平年並だった。訓子府町では発生は認められていない（平年：6月6半旬）。
- (2) 予察ほにおける寄生株率は、長沼町で平年並、芽室町では平年より高く推移している。
- (3) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は平年並、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 寄生株が目立つ場合には、防除ガイドに準拠して茎葉散布を実施する。ただし、散布ムラによる虫の残存があったり散布後に高温少雨が続くと短期間で密度が回復する場合があるので、防除後の経過に注意する。

F. ばれいしょ

疫病 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 疫病は10℃を超えると病原菌の活動が始まり、18～20℃が最適温度とされている。塊茎中で越冬した菌糸が茎の地際部に病斑を形成して伝染源となる。曇雨天が続くとまん延し、高温乾燥条件で停滞する。
- (2) 初発生期予測システム「FLABS」での「基準月日」（下記コラム参照）に23地点中14地点（6月25日現在）が達している。
- (3) 予察ほにおける「FLABS」の「基準月日」は北斗市で6月9日（平年：6月8日）、長沼町で6

月16日（平年：6月18日）と平年並である。芽室町（平年：6月18日）および訓子府町（平年：6月21日）では未達である。

- (4) 予察ほにおける「とうや」では、長沼町（平年：7月15日）、北斗市（平年：7月8日）、芽室町（平年：7月12日）および訓子府町（平年：7月14日）では発生は認められていない。
- (5) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) ばれいしょの生育は、平年並である。
- (7) 以上のことから発生期、発生量ともに平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 初発後は急激にまん延することも懸念されるため、初発生期予測システム「FLABS」を活用して適切な初期防除に努める。さらに降雨によって防除適期を失しないよう気象情報にも注意し、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。
- (2) メタラキシル剤には全道で広く耐性菌が認められているので、薬剤の選択には注意する。
- (3) ダブルインターバル（14日間隔）散布を行う場合は、初発前から散布を開始し、14日間隔での指導参考薬剤を用いる。

「FLABS」運用中

疫病の初発生期予測システム「FLABS」（フラブス）の予測結果を病害虫防除所のホームページで随時更新しています。防除開始の参考にお役立て下さい。

「基準月日」：気象データと萌芽日から「感染好適指数」を計算し、その累積値が「21」に達した日。「初発予測日」は「基準月日」のおよそ2週間後です。

軟腐病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は高温多雨な条件で発生が多く、多窒素栽培により茎葉が過繁茂に生育したり、倒伏すると多発する。
- (2) ばれいしょの生育は、平年並である。
- (3) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 第1回目の茎葉散布は、初発後直ちに行う。特に大雨、強風及び降雹によって倒伏や損傷のあったほ場では本病が多発しやすいので注意する。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。特にオキシリニック酸剤の低感受性菌が出現している地域があるので注意する。

アブラムシ類 発生期：既発（早） 発生量：多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのばれいしょにおけるジャガイモヒゲナガアブラムシの初発期は、芽室町で6月3半旬（平年：6月5半旬）と平年より早く、長沼町で6月1半旬（平年：6月2半旬）、訓子府町では6月2半旬（平年：6月3半旬）と平年よりやや早かった。黄色水盤における捕獲開始期は、長沼町で5月5半旬（平年：6月1半旬）、芽室町では5月5半旬（平年：6月3半旬）と平年より早かった。訓子府町では6月1半旬（平年：6月2半旬）と平年よりやや早かった。
- (2) モモアカアブラムシのばれいしょにおける寄生及び黄色水盤における誘殺は、いずれの地点においても認められていない
- (3) ワタアブラムシの初発期は、長沼町で6月3半旬（平年：6月5半旬）と平年より早かった。芽室町（平年：7月3半旬）、訓子府町（平年：7月1半旬）では初発は認められていない。
- (4) 予察ほのばれいしょにおけるジャガイモヒゲナガアブラムシ寄生頭数は、訓子府町で平年より多く、長沼町及び芽室町で平年よりやや多く推移している。黄色水盤捕獲頭数は訓子府町で平年より多く、芽室町で平年よりやや多く、長沼町では平年よりやや少く推移している。
- (5) 6月3半旬の巡回調査において、オホーツク地方の計2地点でジャガイモヒゲナガアブラムシの寄生が認められた。
- (6) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (7) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

G. てんさい

褐斑病 発生期：やや早 発生量：多
--

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 褐斑病は高温多湿な条件で多発する。
- (2) 本病の一次伝染源は前年の罹病残渣から飛散する分生子と考えられており、前年の発生量が多かったことから、一次伝染源は多いと推測される。
- (3) てんさいの生育は、平年並に推移している。
- (4) 予察ほでの初発は、芽室町の抵抗性弱品種「あまいぶき」で6月26日（平年：7月4日）と平年より早かった。長沼町の「あまいぶき」（平年：7月7日）および訓子府町の抵抗性やや強品種「ライエン」（平年：7月11日）での発生は認められていない。
- (5) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生期は平年よりやや早く、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 初発直後までに散布を開始する。
- (2) マンゼブ剤及び銅水和剤を基幹薬剤とし、散布間隔は14日以下で、高温多湿条件となった場合は散布間隔を10日以下にする。
- (3) QoI剤耐性菌の発生が広範囲に確認されているため、褐斑病に対する防除薬剤として、QoI剤（アゾキシストロビン、クレソキシムメチル、トリフロキシストロビン）は使用しない。
- (4) DMI剤（ジフェノコナゾール、テブコナゾール、フェンブコナゾール、テトラコナゾール）及びカスガマイシン剤耐性菌が全道各地で発生しているため、混合剤も含めこれら系統薬剤の使用回数を可能な限り低減する。
- (5) チオファネートメチル剤に対する耐性菌が全道で発生しているため、薬剤の選択に注意する。
- (6) 本病に罹病しやすい品種が栽培されている地域では本病の発生推移に注意する。

ヨトウガ（第1回） 発生期：やや遅 発生量：やや多
--

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 一般ほにおける前年第2回の発生量は平年よりやや多かったことから、越冬蛹の密度は平年よりやや高いと推測される。
- (2) 予察灯における誘殺開始期は、長沼町で6月2日（平年：6月10日）と平年より早かった。比布町（平年：6月7日）、北斗市（平年：5月23日）、芽室町（平年：6月9日）、訓子府町（平年：6月2日）においては誘殺が認められていない。
- (3) 予察ほでのてんさいにおける産卵初発期は、長沼町で6月2半旬（平年：6月2半旬）と平年並、芽室町では6月3半旬（平年：6月2半旬）と平年よりやや遅かった。訓子府町（平年：6月4半旬）では産卵が認められていない。
- (4) 予察ほにおける産卵量は、芽室町で平年並、長沼町では平年より少なく推移している。
- (5) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生期は平年よりやや遅く、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 被害株率が50%に達した時を目安に薬剤散布を実施すると、幼虫を効率的に防除でき、散布回数を1回にとどめることができる。
- (2) 産卵期にベンゾイル尿素剤を使用することにより、高い防除効果が得られる。
- (3) 薬剤の効果は幼虫の齢が進むにつれて低下するので、散布適期を逸しないよう注意する。

H. たまねぎ

白斑葉枯病 発生期：並 発生量：並
--

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 白斑葉枯病はまとまった降雨の後に気温が上昇すると初発しやすく、その後も多湿条件が続くと多発する。
- (2) 予察ほでの初発期は、長沼町では6月12日（平年：6月15日）と平年よりやや早かった。訓子府町（平年：6月27日）では発生は確認されていない。
- (3) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。

(4) 以上のことから、発生期、発生量ともに平年並と予想される。

2. 防除対策

(1) 初発期の防除が重要であるため、本病の発生が認められたほ場では、できるだけ速やかに薬剤散布を開始する。

軟腐病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は高温多雨条件で発生が多くなる。
- (2) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統薬剤を連用しない。また、オキシリニック酸剤の感受性低下菌が出現しているので注意する。

ネギアザミウマ 発生期：既発（早） 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温乾燥条件を好み、降雨によって増殖が抑制される。
- (2) 予察ほにおける成虫の初発期は、長沼町で5月4半旬（平年：6月1半旬）と平年より早く、訓子府町では5月6半旬（平年：5月6半旬）と平年並であった。
- (3) 予察ほにおける幼虫の初発期は、長沼町で5月4半旬（平年：6月3半旬）と平年より早く、訓子府町では6月2半旬（平年：6月3半旬）と平年よりやや早かった。
- (4) 予察ほにおける寄生密度は、訓子府町で平年よりやや低く、長沼町で平年より低く推移している。
- (5) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、効率的な薬剤散布を行う。茎葉散布は大多数の株の中心葉に軽微な食害が認められてから開始する。ただし、高温に経過したり降雨日が少なく乾燥条件が続くような場合には短期間で密度が上昇するので注意が必要である。
- (2) 近年、道内の広い範囲においてピレスロイド剤に対する抵抗性系統が確認されているため、防除ガイドに準拠して薬剤の選択をおこなう。
- (3) 散布後の防除効果を確認し、効果が劣る場合は異なる系統の薬剤散布を行い、その系統の薬剤の使用は避ける。また、同一系統の薬剤を連用、多用しない。

I. あぶらな科野菜

軟腐病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は高温多雨条件で発生が多くなる。
- (2) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 多窒素栽培を避ける。
- (2) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。
- (3) だいこんでは、播種25～30日後に1回目の薬剤散布を実施する。
- (4) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。また、オキシリニック酸剤の感受性低下菌が出現しているので注意する。
- (5) 銅水和剤散布時には薬害軽減のため、炭酸カルシウム剤を添加する。ただし、収穫間際には汚れを生じる場合があるので留意する。

モンシロチョウ 発生期：既発（並） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのキャベツにおける産卵初発時期は、長沼町及び北斗市で平年並であった。
- (2) 幼虫の発生量は、北斗市で平年より多く、長沼町では平年並であった。

- (3) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫の飛翔が目立ち産卵が多いほ場では、防除ガイドに準拠して薬剤防除を行う。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

コナガ 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのフェロモントラップにおける誘殺数は、長沼町、北斗市及び芽室町で平年並、訓子府で平年よりやや少なく、比布町では平年より少なく推移している。
- (2) 予察ほのキャベツにおける幼虫の寄生頭数は、長沼町で平年より多く、北斗市では平年よりやや多く推移している。
- (3) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤抵抗性の発達しやすい害虫であり、近年道内においてもジアミド剤に対する抵抗性遺伝子の保持個体が確認されている。そのため、防除を行う際は以下の点に留意する。
 - ① セル苗灌注処理を行った場合は、ほ場での防除効果の確認に努める。
 - ② 防除効果が低いと判断された場合は、早めに他系統薬剤による茎葉散布を実施する。
 - ③ 同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション防除を実施する。
 - ④ ジアミド系薬剤感受性低下を予防するため、本システムを含む薬剤を5月に使用した場合は45日間、6月の場合は30日間、7月の場合は25日間は本システムの薬剤を使用しない。（「ジアミド系薬剤感受性低下個体群に対応したキャベツにおけるコナガの防除対策」（令和5年指導参考事項）を参照。）
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生に注意し、効率的な防除に努める。

ヨトウガ（第1回） 発生期：やや遅 発生量：並
--

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのてんさいにおける産卵初発は、長沼町で平年並、芽室町では平年よりやや遅かった。訓子府町では産卵が認められていない。（てんさいの項を参照）。
- (2) キャベツにおける産卵は、長沼町、北斗市ともに確認されていない。
- (3) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は平年よりやや遅く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤防除を行う。
- (2) 薬剤の効果は幼虫の齢が進むにつれて低下するので、散布適期を逸しないよう注意する。
- (3) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

J. りんご

黒星病 発生期：既発（早） 発生量：やや少
--

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 黒星病は平均気温 15～20℃で降雨が多い場合に多発する。
- (2) 予察園での初発は、長沼町（無防除）の「相伝ふじ」（早生ふじ系）では5月15日（平年：5月28日）、と平年より早かった。余市町（慣行防除）の「昂林」（平年値なし）では初発を認めていない。発生量は長沼町で平年並に推移している。
- (3) 一般ほにおける6月3半旬の巡回調査では後志、胆振、渡島、留萌地方の全5地点いずれにおいても発病は確認されていない。
- (4) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 発生量が増加すると、当年の被害が発生するだけにとどまらず、枝や葉で越冬した病斑が翌春の感染源となることから、重点防除時期後も引き続き防除を継続し、翌年の伝染源密度を高めないように留意する。
- (2) 薬剤の散布間隔や回数が適切であっても、散布水量が不足した場合や、防除機の切り返し地点など

の散布ムラが発生した場所において、本病の発生が認められた事例があることから、薬剤散布にあたっては、適切な水量で丁寧に散布を行う。

- (3) チオファネートメチル剤、QoI 剤及びDMI 剤耐性菌の発生が全道で広く認められていることから、薬剤の選択に注意をするとともに、これらの薬剤以外においても同一系統薬剤の連用は避ける。

斑点落葉病 発生期：やや遅 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 斑点落葉病は夏期の高温多湿条件で多発しやすい。
- (2) 予察園での初発は、長沼町（無防除）の「玉林」（平成：6月25日）、余市町（慣行防除）の「昂林」（平成値なし）ともに認められていない。
- (3) 6月の降水量は平成より少なかった。
- (4) 7月の気温は平成より高く、降水量は平成並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生期は平成よりやや遅く、発生量は平成並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、薬剤散布を継続する。

ハマキムシ類 発生期：既発（やや早） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 長沼町の予察園（無防除）における落花直後の被害花叢率は平成より低かった。
- (2) 予察園におけるリンゴコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺開始期は、長沼町で6月12日（平成：6月15日）、余市町B（慣行防除）では6月18日（平成：6月22日）と平成よりやや早かった。余市町A（慣行防除）（平成：6月23日）では誘殺が認められていない。リンゴモンハマキのフェロモントラップ誘殺開始期は、長沼町で6月12日（平成：6月16日）と平成よりやや早かった。余市町A（平成：6月8日）及び余市町B（平成：6月6日）では誘殺が認められていない。
- (3) 予察園におけるリンゴコカクモンハマキのフェロモントラップによる誘殺数は、長沼町で平成よりやや多く、余市町Bで平成並に推移している。リンゴモンハマキのフェロモントラップによる誘殺数は、長沼町で平成よりやや多く推移している。
- (4) 7月の気温は平成より高く、降水量は平成並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平成よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

モモシンクイガ 発生期：既発（並） 発生量：多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 一般園における前年の発生量は平成並だったことから、越冬密度は平成並と推測される。
- (2) 予察園のフェロモントラップによる誘殺開始期は、長沼町（無防除）で6月12日（平成：6月16日）と平成よりやや早かった。余市町B（慣行防除）では6月10日（平成：6月12日）と平成並、余市町A（慣行防除）では6月18日（平成：6月15日）と平成よりやや遅かった。
- (3) 予察園におけるフェロモントラップによる誘殺数は、長沼町で平成より多く、余市町A及びBで平成よりやや多く推移している。
- (4) 7月の気温は平成より高く、降水量は平成並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平成より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

ハダニ類 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 一般園における前年の発生量は平成よりやや少なかったことから、越冬密度は平成よりやや低いと推測される。
- (2) ハダニ類は高温乾燥条件で発生が多く、冷涼多雨条件では発生が少ない。
- (3) 予察園におけるナミハダニおよびリンゴハダニの発生は、長沼町（無防除）、余市町A、B（慣行防除）のいずれの地点においても認められていない。
- (4) 7月の気温は平成より高く、降水量は平成並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平成並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 高温乾燥条件が続くときには発生状況に注意し、必要に応じて薬剤散布を実施する。
- (2) 同一系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性の発達が急速に進むので、防除ガイドに準拠して適正な防除を行う。

キンモンホソガ	発生期：並	発生量：やや少
---------	-------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 一般園における前年の発生量は平年よりやや少なかったことから、越冬密度は平年よりやや低いと推測される。
- (2) 予察園のフェロモントラップによる誘殺数は、長沼町（無防除）および余市町B（慣行防除）では平年より少なく推移している。余市町A（慣行防除）では誘殺を認めていない。
- (3) 長沼町の予察園における被害葉率は、平年よりやや高く推移している。
- (4) 7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生期は平年並、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を実施する。

付記

北海道地方 3か月予報 (7月から9月までの天候見通し)

令和6年6月25日
札幌管区气象台 発表

<予想される向こう3か月の天候>

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

7月 北海道日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道オホーツク海側・太平洋側では、平年と同様に曇りの日が多いでしょう。

8月 天気は数日の周期で変わるでしょう。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

<<気温>>

[北海道地方]

3か月	20	30	50
7月	20	30	50
8月	20	30	50
9月	20	40	40

■低い □平年並 ■高い

<<降水量>>

[北海道地方]

3か月	30	30	40
7月	30	30	40
8月	30	40	30
9月	30	40	30

■少ない □平年並 ■多い